

日本消化器外科学会雑誌編集後記

7月号は原著論文1編、症例報告14編から成っている。いずれも読み応えのあるものばかりである。まず元井らによる膵臓癌切除後の予後予測因子としての腫瘍マーカーの有用性の報告は、宮城県における多施設共同研究の解析から導き出された大変科学的な原著論文である。まさに消化器外科医にしかできない臨床研究であり、われわれのあるべき方向性を示していただいたものである。心から”Congratulations!!”と申し上げたい。また14編の症例報告は、いずれも本邦においてまれな疾患について臨床病理学的な考察が十分になされた秀逸な論文ばかりである。各々のご施設においてご協力いただいた病理医の先生方にも心から深謝申し上げたい。

私事ではあるが、30年前に大学を卒業し1年半の臨床研修を終え、不安と期待を胸に関連病院に出向した。その病院の院長は母校の教授職を長年にわたって務められた石川浩一先生であった。先生はすでに70歳を越えておられたが、得も言われぬ威厳と風格に満ちておられた。先生からは外科医としてだけでなく、人間としても数え切れないご薫陶をいただいたが、その中で症例報告に関することがある。

先生はわが国で第一例目となる膝窩動脈外膜囊腫症例を1960年に日本外科学会雑誌に報告されておられるが、まさに教授になられる直前であったと思われる。一例一例の患者を細心の注意を払って診察し所見をまとめること、そして過去に報告がなければ論文の形にして発表することの重要性を繰り返し強調されておられた。症例報告をすることは我々臨床医の責務なのである。独創性のある報告をするためには日頃から関連する分野の学術雑誌に目を通しておくことが必須であることは言うまでもない。

先生には若輩の身を顧みず仲人をお願いした。そのときの満面の笑みをたたえた先生のお写真は我が家の宝物である。また出張の後半には膵頭十二指腸切除の前立ちもしていただいた。随分ご負担をおかけしたことと思う。90歳半ばを越えられた今も、背筋をピシッと伸ばし昔と変わらないお姿で母校の同窓会にご出席になられている。いつまでもお元気でとただただ願うばかりである。

(正木 忠彦)

2012年7月1日